

パニウム - ナンバー・スリー

幻と定めの時：預言的パラレル

Jeff Pippenger

2025-02-28

十人のおとめのたとえば、十四万四千の歴史において、寸分違わず繰り返されている。ハバクク書二章は、終わりに語る幻を指し示すことによって、そのたとえの核心を明らかにしている。

私は見張り所に立ち、やぐらに身を置いて、彼が私に何を語られるか、また私が咎められるとき何と答えるべきかを見ようと見張る。主は私に答えて言われた。「幻を書き、これを板に明瞭に記せ。読む者が走りながらでも読めるように。というのは、この幻はなお定められた時のため、終わりには必ず語り、偽りではない。遅れるように見えても、それを待て。必ず来る。遅れることはない。見よ、高ぶる者の魂は彼のうちにまっすぐではない。しかし、義人はその信仰によって生きる。」ハバクク書 2:1-4.

ダニエル書11章27節も「定められた時」を示している。

この二人の王の心は悪事を企てることに向かい、同じ食卓を囲んで偽りを語るが、うまくはいかない。終わりはなお、定められた時に至るからである。ダニエル書 11:27

ローマによって確立された「幻」は「定めの時」のためのものであり、心に悪事を企み、一つの卓を囲んで偽りを語る二人の王は、「幻」が「語る」前に到来する預言的な道標を指し示している。定めの際の前に二人の王は「偽り」を語り、定めの際に幻が語る時、それは偽らない。定めの際とはアメリカ合衆国における日曜法であり、その卓での会合は預言的期間の始まりを画する。「幻」は日曜法において歴史の中で成就するが、その確立は日曜法に先立っている。これは、忠実な者たちがその幻を待てと命じられ、またその幻を公表せよと命じられていることから明らかである。もしその幻がまだ確立されていないのなら、成就に先立ってそれを公表することなどできるはずがない。

エレミヤは、幻を「待つ」者たちを象徴している：

主よ、あなたをご存じです。私を覚え、私を顧み、私の迫害者に対して私の仇を討ってください。あなたが忍耐しておられるからといって、どうか私を取り去らないでください。あなたのために私は辱めを受けてきたことを知ってください。あなたのことばが見いだされ、私はそれを食べました。あなたのことばは私の心の喜び、歓びとなりました。万軍の主なる神よ、私はあなたの名によって呼ばれているからです。私はあざける者の集いに座らず、楽しみもしませんでした。あなたの御手のゆえに、私はひとりで座っていました。あなたが私を憤りで満たされたからです。なぜ私の痛みは絶えず、私の傷はいやしがたく、癒やされることを拒むのでしょうか。あなたはまったく、私にとって偽り者のように、また涸れる水のようになられるのですか。それゆえ主はこう言われる。「もしあなたが立ち帰るなら、私はあなたを再び連れ戻し、あなたは私の前に立つであろう。もし卑しいものの中から尊いものを取り出すなら、あなたは私の口のようになる。彼らをあなたのもとに帰らせよ。しかし、あなたは彼らの

もとへ戻ってはならない。私はあなたをこの民に対して、堅固な青銅の城壁とする。彼らはあなたと戦うが、あなたに勝つことはできない。私はあなたとともにいて、あなたを救い、あなたを助け出すからだ」と主は言われる。「私は悪しき者の手からあなたを救い出し、恐るべき者の手からあなたを贖い出す。」 エレミヤ書 15:15-21

米国の「日曜法」は、「覚えよ」という象徴に印が刻まれるところである。そこでこそ、常に覚えておくべき安息日が、最後の試練の争点となる。忘れ去られていたツロの淫婦が思い出されるのも、そこである。そこで神はバビロンの罪を覚え、彼女に倍の裁きを下される。

「語る」という出来事が位置づけられている道標は、アメリカ合衆国における日曜法である。そこで地の獣は竜のように「語る」からだ。同じ道標において、バラムの預言の筋に登場するろばも「語る」。バプテスマのヨハネが生まれると、神によって話すことを禁じられていた彼の父ザカリヤが「語る」。

さて、八日目になったとき、人々は幼子に割礼を施しに来て、父の名にちなんでその子をザカリヤと名づけようとした。ところが母は答えて、「いいえ、その子はヨハネと呼ばれます」と言った。人々は彼女に言った。「あなたの親族には、この名で呼ばれている者はひとりもない」。そして彼らは父に合図をして、なんと名づけたいのかをたずねた。彼は書き板を求め、「その名はヨハネ」と書いたので、人々は皆驚いた。するとたちまち彼の口が開き、舌がほどけ、彼は語り、神をほめたたえた。ルカによる福音書1章59-64節。

アメリカ合衆国における日曜法の時、教皇制の致命的な傷は癒され、教皇制は七つのうちから出た八番目の王国となる。アメリカ合衆国では、その大統領ドナルド・トランプが七人のうちから出た八番目の大統領である。同じ時点で、十四万四千人は旗印として掲げられる。十四万四千人は、七つのうちから出た八番目の教会である。日曜法の時に、八という数が印され、八日目にヨハネは割礼を受け、ザカリヤは語った。ザカリヤという名は、「神が『覚えておられる』」という意味である。日曜法は、「覚えよ」とされた真の安息日の偽物である。日曜法の時に、ツロの淫婦は「覚えられる」。日曜法の時に、神はバビロンの罪を「覚え」、その裁きを倍にされる。

エレミヤは、最初の失望を味わい、遅れている幻を待つ者たちを表す。彼は、幻が語り、偽りを言わない定めの際に神の口となる忠実な者たちを表す。定めの際に語るその幻に先立って、同じ卓を囲んで互いに偽りを述べる二人の王がいる。その出来事は日曜法に先行し、したがって13節から15節に示されているパニウムの歴史の中で起こる。それは「民を略奪する者たち」が「幻」を確立するのと同じ時期である。

また、そのころには多くの者が南の王に逆らって立ち上がる。さらに、あなたの民の略奪者たちも、幻を成就させようとして高ぶる。しかし、彼らは倒れる。ダニエル 11:14。

「強盗たち」とはローマのことであり、終末時代のローマはカトリックである。教皇はその幻を確立し、それは日曜法の直前の時期に行われる。彼は、トランプがプーチンに勝利するパニウムの戦いに介入することによってそれを行う。その戦いは紀元前200年に起こり、それは異教ローマが預言史に登場したのと同じ年である。大ポンペイウスは紀元前63

年にエルサレムを征服した。この出来事は彼の東方遠征の途上、ハスモン朝の兄弟ヒルカノス2世とアリストブロス2世の間の内戦に彼が介入したときに起こった。ポンペイウスはヒルカノス2世の側につき、エルサレムを包囲し、3か月の包囲ののちに最終的に都市を陥落させた。これはユダヤの独立の終わり、その地域におけるローマの支配の始まりを画した。のちにこの地域はローマの支配下で属州となる。

日曜法に先立って、ローマ教皇がパニウムの戦いに関連する歴史に介入する。彼が預言的歴史の舞台に登場すると、その出現が幻を確立する。すなわち、アメリカ合衆国における日曜法の「定められた時」に、なお「語る」ことになるその幻である。遅れた「幻」とは、十人の乙女のたとえにおける遅延の時の始まりを画した、成就しなかった予言のことである。それはまた、黙示録十四章の三天使のうち第二の天使の到来をも画した。遅れてもなおその成就を「待て」と促す励ましとともに、待機の時代を到来させた失敗した予言であった。

ミラー派の歴史において、1844年8月12日から17日までのエクセターのキャンプ集会で、待機期間は終わりを迎えた。予言の失敗によってもたらされた失望が、二つの階級の乙女たちの品性を最終的に確定させることを目的とした待機期間を導き入れ、その後には先の失敗した予言の説明が続いた。エクセターで与えられた説明は、その幻が成就する際に伴う詳細を明らかにしている。同じ特徴は、キリストが弟子たちをカイサリア・フィリピに連れて行かれたとき、マタイによる福音書16章にも見られる。その時点以降、キリストは十字架で何が起こるのかを弟子たちに直接教え始められた。

その時から、イエスは弟子たちに、ご自身がエルサレムに行き、長老たち・祭司長たち・律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならないことを示し始めた。マタイによる福音書 16章21節。

先に引用した聖句は、イエスが、ペテロの「イエスは生ける神の子キリストである」という告白が聖霊の導きによるものだと認められた箇所と、キリストがやがて来る十字架について彼らに教え始めたときにペテロがそのメッセージに反対し、キリストがペテロをサタンと呼んだ箇所との間に位置していることに留意すべきである。幻が確立されるときに封印が解かれるメッセージは、二種類の礼拝者を生み出し、その両方がペテロによって表されている。

カイサリア・ピリピはパニウムに当たり、いずれも、キリストの時系列では十字架という定められた時へ、ミラー派の歴史では1844年10月22日へ、そして今日では日曜法へと導く。パニウム、カイサリア・ピリピ、そしてエクセターのキャンプ集会は、同じ預言的な道標である。この道標において、物語に教皇が登場することによって幻が確立される。幻の確立は定められた時に先行する。というのも、カイサリア・ピリピは十字架に先立ち、エクセターのキャンプ集会は1844年10月22日に先立ち、そして紀元前200年のパニウムは、紀元前63年にポンペイウスがエルサレムを征服することに先立ったからである。米国での日曜法の前のある時点で、ツロの淫婦である教皇が、預言の歴史に公然と登場する。そのとき、幻は確立される。

その幻は、第十一章の第三の代理戦争において確立されている。最初の代理戦争は最後の代理戦争を例証しているため、最後の代理戦争は最初のものと同じ預言的特徴を備える

ことになる。共同体の支配者を意味する名ウラジーミルに代表される南の王は、ローマ教皇と米国大統領の同盟によって一掃される。黙示録17章の成就として、最後の教皇は七人に属する第八となり、最後の米国大統領も、百四十四千人の旗手もまた、同様に七人に属する第八となる。

当初、教皇と大統領の関係は「秘密の同盟」であり、第八にして最後の大統領と教皇の同盟もまた「秘密」となる。というのも、この時期にはツロの淫婦が予言的に「忘れられる」からである。レーガンと教皇ヨハネ・パウロ二世の同盟は秘密であったが、同時に教皇は世界で最も顔を知られた人物となった。地のすべての王たちと姦淫を行うツロの淫婦について「忘れられる」のは、教皇制に特有の一つの性質、すなわち彼女のあらゆる罪を一つの反逆というカテゴリーに総括してしまう性質に関わることである。その特質とは、カトリック教会が主張する「無謬性」である。この事実を見抜くことは極めて重要であるため、ここで本稿をホワイト姉妹の著作からの一章で締めくくる。これらの論点は次の記事で続けるが、『The Great Controversy』の次の章を読むにあたり、トランプの閣僚のほとんどはローマ・カトリックであり、そこにペンテコステ派が混じり、さらに最近、聖書の予言における反キリストのための公の祈りを呼びかけたフランクリン・グラハムの絶えざる影響が及んでいることを忘れないでほしい。

脅かされる良心の自由

今日では、ローマ主義は、以前の時代に比べてプロテスタントからはるかに好意的に見られている。カトリックが優勢でない国々では、教皇派は影響力を得るために融和的な路線をとっており、その結果、宗教改革の諸教会を教皇制の聖職階層から隔てている教理に関して無関心が高まりつつある。結局のところ、重要な点については従来思われていたほど大きくは異ならない、そして私たちが少しばかり譲歩すればローマとのよりよい理解に至るだろう、という見解が勢いを得ている。かつては、プロテスタントは多大な代価を払って勝ち取った良心の自由を高く評価していた。彼らは子どもたちに教皇制を忌み嫌うように教え、ローマとの調和を求めることは神への不忠であると考へた。しかし今や、表明されている見解はなんと大きく異なっていることか。

教皇制度の擁護者たちは、教会は中傷されてきたと主張し、プロテスタント世界もその主張を受け入れる傾向にある。多くの者は、無知と暗黒の世紀における教会の支配を特徴づけた忌まわしい行為や不条理によって今日の教会を裁くのは不当だと訴える。彼らは、その恐るべき残虐さを当時の野蛮の結果だとして弁護し、近代文明の影響によって教会の態度が変わったのだと主張する。

これらの人々は、この傲慢な権力が八百年ものあいだ唱えてきた不可謬性の主張を忘れてしまったのだろうか。撤回されるどころか、この主張は十九世紀に、かつてないほどいっそう断固として確認された。ローマが「教会はこれまで誤ったことがない。しかも聖書によれば、これからも決して誤ることはない」(John L. von Mosheim, Institutes of Ecclesiastical History, book 3, century II, part 2, chapter 2, section 9, note 17)と主張している以上、過去の時代にその歩みを支配してきた原則をどうして放棄できようか。

ローマ・カトリック教会は、自らの不可謬性の主張を決して放棄しない。自らの教義を退ける者を迫害するにあたって行ってきたすべてのことを正しいと見なしており、機会さえ与えられれば、同じ行為を繰り返さないだろう。いま世俗政府によって課されている制約が取り払われ、ローマがかつての権勢を取り戻すなら、たちまちその専制と迫害が再びよみがえるだろう。

「ある著名な作家は、良心の自由に関する教皇制の聖職者階層の態度と、その政策の成功がとりわけアメリカ合衆国を脅かす危険について、次のように語っている。『アメリカ合衆国におけるローマ・カトリックへのいかなる恐れも、偏狭さや子どもじみたもののせいにしてしようとする人は多い。そうした人々は、ローマ・カトリックの性格や態度の中に、わが国の自由な諸制度に敵対するものを何ひとつ見いださず、その成長の中にも不吉な兆しを何も認めない。ではまず、わが国の政府のいくつかの基本原則を、カトリック教会のそれと比較してみよう。』」

アメリカ合衆国憲法は良心の自由を保障している。これほど大切に根本的なものはない。教皇ピウス9世は、1854年8月15日付の回勅で次のように述べた。「良心の自由を擁護するという荒唐無稽で誤った諸学説や妄言は、きわめて有害な誤謬であり、国家において他の何にも増して恐るべき害悪である。」同じ教皇は、1864年12月8日付の回勅において、「良心の自由および宗教礼拝の自由を主張する者」ならびに「教会は強制力を行使してはならないと主張する者」をも断罪した。

「アメリカ合衆国におけるローマの特有の態度は、心変わりを意味しない。ローマは力の及ばないところでは寛容である。オコナー司教はこう言う。『宗教の自由は、カトリック世界に危険を及ぼすことなく、その反対を実施できるようになるまで、単に容認されているにすぎない。』... セントルイスの大司教はかつてこう言った。『異端と不信仰は犯罪であり、そして、たとえばイタリアやスペインのように、国民すべてがカトリック教徒で、カトリック教がその国法の本質的な一部をなしているキリスト教国においては、それらは他の犯罪と同様に処罰される。』...」

「カトリック教会のすべての枢機卿、大司教、司教は教皇への忠誠の誓いを立て、その中には次のような文言がある。『異端者、分裂主義者、ならびに前述の我らの主（教皇）またはその後継者に反逆する者を、私は全力を尽くして迫害し、反対する。』」 - ジョサイア・ストロング『われらの国』第5章、第2～4段落。

ローマ・カトリック教会の中にも、真のキリスト者がいるのは確かである。その教会には、与えられている光の限りに神に仕えている人が何千人もいる。彼らは神の御言葉に触れることを許されておらず、そのため真理を見分けることができない。生きた心からの奉仕と、単なる形式や儀式の繰り返しとの対比を、彼らは見たことがない。人を惑わせ、満たすことのない信仰のもとで教育されてきたこれらの魂を、神は憐れみ深いまなざしで見つめられる。神は、彼らを取り巻く濃い闇に光の光線を差し込ませるだろう。神はイエスにあるとおりの真理を彼らに明らかにし、多くの者がやがて神の民の側に身を置くようになるだろう。

しかし、ローマ・カトリック主義という体系は、教会の歴史のいかなる過去の時期と比べても、今だからといってキリストの福音とより調和しているわけではない。プロテスタント諸教会は深い暗闇の中にある。さもなければ、時代のしるしを見分けられ

るはずである。ローマ・カトリック教会の計画と活動様式は遠大にして広範である。同教会は、世界の支配を取り戻し、迫害を復活させ、プロテスタントが成し遂げてきたすべてを打ち消すための激烈で断固たる闘争に備え、その影響力を拡大し権勢を強めようとして、あらゆる手段を講じている。カトリックはあらゆる面で勢力を伸ばしている。プロテスタント諸国におけるカトリックの教会や礼拝堂の増加を見よ。アメリカにおける同教会の大学や神学校の人気を見よ—プロテスタントによってこれほど広く利用され、支持されているのではないか。イングランドにおける儀式主義の伸長と、カトリック陣営への頻繁な転向を見よ。これらの事柄は、福音の純粋な原理を尊ぶすべての者に不安を呼び起こすべきである。

プロテスタントは教皇主義に迎合し、これを庇護してきた。彼らは、教皇派自身ですら目を見張り理解に苦しむような妥協と譲歩を重ねてきた。人々はローマ・カトリック主義の真の性格と、その至上権から生じ得る危険に目を閉ざしている。市民的および宗教的自由に対するこの最も危険な敵の前進に抗するため、人々を奮い立たせる必要がある。

多くのプロテスタントは、カトリック教は魅力に欠け、その礼拝は退屈で無意味な儀式の繰り返しにすぎないと考えている。ここで彼らは誤っている。ローマ主義は欺瞞に基づいているにせよ、粗野で拙劣なペテンではない。ローマ・カトリック教会の礼拝はきわめて印象的な典礼である。その華麗な演出と厳粛な儀式は人々の感覚を魅了し、理性と良心の声を沈黙させる。目は魅了される。壮麗な教会、威厳ある行列、黄金の祭壇、宝石を散りばめた聖龕、選りすぐりの絵画、精緻な彫刻が、美への愛に訴えかける。耳もまた魅了される。音楽は比類ない。重厚なオルガンの豊かな音色が多くの声の旋律と溶け合い、壮麗な大聖堂の高いドームや柱の並ぶ身廊に鳴り渡るとき、畏怖と敬虔の念を心に刻まずにはおかない。

この外面的な壮麗さ、虚飾や儀礼は、罪に病んだ魂の渴望をあざ笑うばかりで、内なる腐敗のしるしである。キリストの信仰は、自らを引き立てるためにそのような飾り立てを必要としない。十字架から輝く光に照らされると、真のキリスト教はこの上なく純粋で美しく、外面的な装飾によってその真の価値を少しも高めることはできない。それは聖なる美しさ、すなわち柔和で静かな霊であり、神の前に価値あるものである。

文体の華麗さは、必ずしも純粋で高尚な思想の指標とはならない。芸術に対する高邁な観念や繊細に洗練された趣味は、しばしば地上的で官能的な心にも存在する。そうしたものはしばしばサタンに利用され、人々に魂の必要を忘れさせ、来るべき永遠のいのちを見失わせ、彼らの無限の助け主から背を向けさせ、ただこの世のためだけに生きるように仕向ける。

外面的な宗教は、新生していない心にとって魅力的である。カトリックの礼拝の荘厳さと儀式には人を誘惑し魅了する力があり、多くの人がそれに欺かれて、ローマ・カトリック教会をまさに天国への門と見なすようになる。真理の土台の上にはしっかりと足を据え、神の御霊によって心が新しくされた者以外には、その影響に耐えうる者はいない。キリストを体験的に知っていない何干という人々が、力のない敬虔の形だけを受け入れるように導かれるだろう。そのような宗教こそ、大勢の人々が望むものである。

教会が赦免の権利を主張することは、ローマ教徒に罪を犯してもよいかのように思わせる。また、それがなければ教会からの赦しは与えられない告解という制度も、悪に免罪符を与える傾向がある。墮落した人間の前にひざまずき、心の秘めた思いや想念を告白によってさらけ出す者は、自らの人間性を貶め、魂のあらゆる高貴な本能を卑しめている。自らの生涯の罪を司祭に誤り、罪深いただの人間であり、しばしば酒と放縦に汚れている者に打ち明けることで、彼の人格の規範は引き下げられ、その結果として彼自身も汚される。司祭は神の代表として立つがゆえに、彼の神観は墮落した人間の姿に似たものへと貶められる。この、人が人に対して行う屈辱的な告白こそが、世界を汚し、最終的な滅びにふさわしいものにしてきた多くの悪の、ひそかな源泉である。しかし、自己放縦を愛する者にとっては、魂を神に開くよりも、同じ死すべき人間に告白するほうが心地よい。人間の本性には、罪を捨てるよりも贖罪行為をするほうが受け入れやすい。肉の欲を十字架につけるよりも、粗衣をまとい、いらくさに身を刺され、苛む鎖に縛られて肉体を苦しめるほうがたやすい。肉的な心が、キリストのくびきに服するよりもすすんで負おうとするくびきは、重い。

ローマ教会とキリストの初臨の時のユダヤ教会との間には、驚くほどの類似がある。ユダヤ人は密かに神の律法のあらゆる原則を踏みにじりながら、外面的にはその戒めの遵守に厳格であり、服従を苦痛で重荷とするような苛細な要求や伝統を付け加えてそれを重くしていた。ユダヤ人が律法を敬うと公言したように、ローマ・カトリック教徒も十字架を崇敬すると主張する。彼らはキリストの苦難の象徴を高く掲げながら、その象徴が表すお方を生活において否んでいる。

ローマ教皇派は、自分たちの教会や祭壇、衣服に十字架を付ける。どこにでも十字のしるしが見られ、いたるところで外面的に尊ばれ、あがめられている。だがキリストの教えは、無意味な伝統、誤った解釈、苛酷な要求の山の下に埋もれてしまっている。救い主が偏狭なユダヤ人について語られた言葉は、ローマ・カトリック教会の指導者たちに対して、いっそう強く当てはまる。「彼らは担いがたい重い荷を束ねて人々の肩に載せ、自分たちはそれを指一本でさえ動かそうとしない。」マタイ23:4。良心的な魂は、怒りを買った神の憤りを恐れて絶えずおののかかれている一方で、多くの教会の高位聖職者は贅沢と肉的な享樂の中で暮らしている。

像や聖遺物の礼拝、聖人への祈願、そして教皇を高く崇めることは、人々の心を神とその御子から引き離すためのサタンの策略である。彼らを滅ぼすために、彼は人々が救いを見いだすことのできる唯一のお方から彼らの注意をそらそうと努める。彼は、「すべて疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげよう」と言われた唯一のお方の代わりになりうるあらゆるものへと、彼らの心を向けさせる。マタイ11:28。

サタンは、神のご性質、罪の本質、そしてこの大きな論争で問題となっている真の争点を歪めて伝えることに、絶えず努めている。彼の詭弁は神の律法の義務を軽んじ、人々に罪を犯してもよいかのように思わせる。同時に彼は、人々に神についての誤った観念を抱かせ、神を愛するよりも恐れと憎しみをもって見るようにする。彼自身の性格に内在する残酷さが創造主に帰せられ、それは宗教制度に具現化され、礼拝のさまざまな様式に表れる。こうして人々の心は盲目にされ、サタンは彼らを自分の手先として取り込み、神に対する戦いをさせる。神の属性に関する歪められた観念によつ

て、異教の諸国民は、神の恵みを得るには人身のいけにえが必要だと信じ込まされ、偶像礼拝のさまざまな形態のもとで恐るべき残虐行為が行われてきた。

ローマ・カトリック教会は、異教とキリスト教の諸形態を結び合わせ、しかも異教と同様に神の御性質を歪めてきて、劣らぬほど残酷で忌まわしい行為に手を染めてきた。ローマが覇権を振るった時代には、その教義への同意を強要するための拷問器具が存在した。彼女の主張に屈しない者のためには火刑台があった。審判において明らかにされるその時まで決して知り得ない規模の大虐殺もあった。教会の高位聖職者たちは、彼らの主であるサタンのもとで、犠牲者の命を終わらせることなく可能な限り最大の苦痛を与える手段を考案することに励んだ。多くの場合、この地獄のような所業は人間の耐久力の極限まで繰り返され、ついに生命力が尽き、苦しむ者は死を甘美な解放として迎えた。

ローマに敵対する者たちの運命はこのようなものだった。一方、その信奉者たちには、鞭打ちや飢餓、想像しうる限りの、胸が悪くなるほどのあらゆる形の肉体的な苦行という懲戒を課した。天の恩寵を得ようとして、悔い改める者たちは自然の法則を破ることで、神の律法をも破ってしまった。彼らは、神が人の現世の旅路を祝福し喜びで満たすために結び合わせた絆を断ち切るよう教え込まれた。教会の墓地には、自然の愛情を抑え込み、同胞への同情のあらゆる思いや感情を神に不快なものとして抑圧しようと、生涯をむなしい努力に費やした犠牲者が、何百万と眠っている。

私たちが、サタンの執拗で断固たる残酷さを理解したいなら、それは神のことを聞いたことのない人々の間ではなく、キリスト教世界のまさに中心部で、またその全域にわたって何世紀にもわたり現れてきたのだが、ローマ・カトリック主義の歴史を見れば十分である。この巨大な欺瞞の体系を通して、悪の君は神に不名誉をもたらし、人間に惨めさをもたらすという目的を達成する。そして、彼がいかに自らを偽装し、教会の指導者たちを通してその業を成し遂げるかを見るとき、なぜ彼が聖書に対してこれほど激しい敵意を抱くのかを、よりよく理解できるだろう。もしその書が読まれるなら、神のあわれみと愛が明らかにされ、神が人々にこれらの重荷のいずれも課してはおられないことがわかる。神が求めておられるのは、砕かれた悔いた心、へりくだった従順な霊だけである。

キリストはその生涯において、天国にふさわしい者となるために男女が修道院に閉じこもるような模範を示してはいない。愛や同情を抑えつけるべきだと教えられたこともない。救い主の心は愛にあふれていた。人が道徳的完全に近づけば近づくほど、その感受性はいっそう鋭くなり、罪に対する洞察はいっそう鋭敏になり、苦しむ者への同情はより深くなる。教皇は自らをキリストの代理者と称するが、その品性は私たちの救い主のそれと比べてどうだろうか。天の王である彼に敬意を払わないからといって、人々を投獄したり拷問台に送ったりすることが、キリストにあったらうか。彼を受け入れない者を死に定めると宣告する御声が聞かれたことがあったらうか。サマリヤのある村の人々から冷遇されたとき、使徒ヨハネは憤ってこう尋ねた。「主よ、エリヤがしたように、天から火を呼び下して彼らを焼き滅ぼしましょうか。」イエスは弟子をあわれみの目を見て、その激しい心を戒めて言われた。「人の子は、人のいのちを滅ぼすためではなく、救うために来たのだ。」（ルカ 9:54, 56）キリストが示された精神と、彼の自称する代理者のそれとは、なんと異なることだろう。

ローマ教会はいまや、世界に対して見栄えのよい外観を取り繕い、恐るべき残虐の記録を弁解で覆い隠している。自らをキリストのような衣で装ってはいるが、その本質は変わらない。過去の時代に存在した教皇制のあらゆる原理は、今日もなお存続している。最も暗黒の時代に案出された教義も、いまなお保持されている。誰も自らを欺いてはならない。今日、プロテスタントが進んで敬意を払おうとしているその教皇制は、宗教改革の時代、神の人々が命の危険を冒してその不義を暴いた、あの世界を支配したものと同じである。彼女は、王や諸侯の上に君臨し、神の特権を主張したのと同じ高慢と傲慢な思い上がりをいまも備えている。人間の自由を踏みにじり、いと高き方の聖徒たちを殺害した当時に劣らず、その精神はいまもなお残酷で専制的である。

教皇制は、予言が述べたとおりの、後の時代の背教そのものである。テサロニケ人への第二の手紙 2章3、4節。目的のために最も都合のよい姿を装うことは、その政策の一部である。しかし、カメレオンのように姿を変えるその外見の下に、それは蛇の変わることのない毒を隠し持っている。「異端者、または異端の疑いのある者に対しては、信義を守るべきではない」(Lenfant, 第1巻, 516ページ)と宣言している。千年にわたる記録が聖徒たちの血で綴られているこの権力を、今やキリストの教会の一部として認めるべきなのであろうか。

プロテスタント諸国では、カトリックは昔ほどプロテスタンティズムと大きく異ならないという主張がなされているが、それはまったく根拠のないことではない。変化はあった。しかし、その変化は教皇制に生じたのではない。確かに、カトリックは今日のプロテスタンティズムの多くに似ている。というのも、宗教改革者の時代以来、プロテスタンティズムがあまりにも大きく墮落してしまったからである。

プロテスタント諸教会が世の歡心を買おうとしてきたため、偽りの博愛が彼らの目をくらませた。彼らには、どんな悪であっても善いと信じるのが正しいとしか見えず、その必然の帰結として、ついにはどんな善であっても悪いと信じるようになるだろう。聖徒たちに一度伝えられた信仰を擁護して立つべきところを、彼らは今や、いわば、ローマ教会に対して、これまでの愛のない見解をわび、自らの偏狭さの赦しを懇願している。

ローマ・カトリック教を好意的に見ていない人々の中でさえ、その権勢と影響力に危険をほとんど感じていない者が少なからずいる。多くの人は、中世に蔓延していた知的・道徳的な暗黒が、その教義や迷信、圧制の広がりを助長したのだと主張し、さらに、現代のより高い知性、知識の一般的普及、宗教問題における自由化の進展が、不寛容と専制の復活を許さないのだとも言う。この啓蒙された時代にそのような事態が起こり得るという考えそのものが嘲笑される。知的にも道徳的にも宗教的にも偉大な光がこの世代を照らしているのは事実である。神の聖なる御言葉が開かれ、そのページを通して、天からの光が世界に注がれてきた。しかし、与えられた光が大きければ大きいほど、それを曲げて退ける者の暗闇はいっそう深くなることを忘れてはならない。

祈りをもって聖書を研究するなら、プロテスタントは教皇制の真の性格を知り、それを忌み嫌って遠ざけるようになるであろう。ところが多くの者は自分の賢さに自惚れて、真理へ導かれるためにへりくだって神を求める必要を感じない。自らの啓蒙を誇りながら、彼らは聖書にも神の力にも無知である。彼らは良心の呵責を鎮める何らか

の手段を必要としており、できるだけ霊的でなく、しかもへりくだりを最小限にすませるものを求める。彼らが望むのは、神を覚える方法として通用しながら、実は神を忘れさせる方法である。教皇制は、こうした欲求に実によく適合している。これは、ほとんど全世界を包み込む二つの種類の間——自分の功績によって救われようとする者と、罪の中にありながら救われようとする者——のために備えられている。ここにその力の秘密がある。

深い知的暗黒の時代が、教皇制の成功にとって好都合であることは示されてきた。やがて、大いなる知的光明の時代もまた、その成功に等しく好都合であることが明らかにされるであろう。昔、人々が神の言葉も真理の知識も持たなかったとき、彼らの目は覆われ、足もとに張りめぐらされた網を見ないまま、幾千もの人々が罠にかかった。この時代にもまた、人間的な思弁のまばゆい輝き——「偽りと呼ばれる科学」——に目をくらます者が多く、彼らは網を見分けることができず、目隠しでもされたかのように易々とそこへ踏み込む。神は、人間の知的能力が造り主からの賜物として受けとめられ、真理と義に仕えるために用いられることを意図しておられた。だが、誇りと野心が抱かれ、人が自分の理論を神の言葉よりも高く掲げるとき、知性は無知にも勝って大きな害をもたらす。こうして、聖書への信仰を掘り崩す今日の偽りの科学は、その魅力的な装いをまとった教皇制を受け入れる道備えをするうえで、暗黒時代に知識が抑圧され、その権勢拡大への道が開かれたのと同じくらい、成功を収めることになるだろう。

アメリカ合衆国において、教会の制度と慣習に国家の支持を確保しようとする現在進行中の運動において、プロテスタントは教皇派の後を追っている。いやそれどころか、彼らは、教皇制が旧世界で失った至上権を、プロテスタントのアメリカにおいて取り戻すための扉を開いている。そして、この運動にいつそう重大な意味を与えているのは、その主たる目標が日曜遵守の強制にあるという事実である。日曜遵守はローマ教会に端を発する慣習であり、ローマ教会が自らの権威のしるしであると主張しているものである。世の慣習への同調、神の戒めよりも人間の伝統を敬うという、教皇制の精神がプロテスタント諸教会に浸透し、彼らをして、教皇制が先に行ってきたのと同じ日曜日の神聖視の働きを行うように導いているのである。

読者が、間もなく到来する闘争で用いられる手段を理解したいなら、過去の時代にローマが同じ目的のために用いた手段の記録をたどりさえすればよい。教皇派とプロテスタントが結託して自分たちの教義を退ける者たちにとのように対処するかを知りたいなら、ローマが安息日とその擁護者たちに対して示した精神を見ればよい。

王の布告、公会議、そして世俗権力に支えられた教会の法令こそが、異教の祭りがキリスト教世界で名誉ある地位を獲得するに至るための諸段階であった。日曜遵守を強制する最初の公的措置は、コンスタンティヌスが制定した法律（西暦321年）であった。この法令は「尊ぶべき太陽の日」には都市住民に休息を命じたが、農民には農作業の継続を認めた。実質的には異教的な法令であったが、皇帝は名目上キリスト教を受け入れた後もこれを施行した。

神の権威の代わりとしては王の命令では十分でなかったため、王侯の寵を求め、コンスタンティヌスの特別の友人にして阿諛者であった司教エウセビオスは、キリストが安息日を日曜日へ移したと主張した。新しい教義を立証するための聖書の証言は一つ

として示されなかった。エウセビオス自身も、知らず知らずのうちにその虚偽を認め、変更の真の推進者を指し示している。「安息日に行くべき義務であったすべての事柄を、私たちは主の日へと移した」と彼は言う。-ロバート・コックス『Sabbath Laws and Sabbath Duties』538ページ。しかし、その根拠がないにもかかわらず、この日曜擁護論は、人々が主の安息日を踏みこむことを助長し、彼らを大胆にさせた。世の栄誉を望む者は皆、この人気の祝日を受け入れた。

教皇権が確固たるものとなるにつれて、日曜日を重んずる動きは続けられた。しばらくの間、人々は礼拝に出ていないときには農作業に従事し、週の第七日は依然として安息日と見なされていた。だが、次第に変化がもたらされた。聖職者は、日曜日にはいかなる民事上の争いについても判決を下すことを禁じられた。ほどなくして、身分のいかに問わずすべての者に、違反すれば自由民には罰金、召使いには鞭打ちの刑が科されるという条件で、日常の労働を慎むよう命じられた。のちには、富裕な者は財産の半分を没収されると定められ、ついには、それでもなお頑なであれば奴隷にされるとされた。下層階級は永久追放に処せられることとされた。

奇跡もまた持ち出された。そのほかの不思議の一つとして、次のように報告された。すなわち、日曜日に畑を耕そうとしていたある農夫が、鉄片で鋤を掃除したところ、その鉄が手にしっかりとくっついて離れず、彼は二年間それを持ち運ばねばならず、「彼にとってこの上なく大きな苦痛と恥辱であった」と。-フランシス・ウェスト『主の日に関する歴史的・実践的論考』174ページ

その後、教皇は次のように指示した。小教区司祭は、日曜日を守らない者たちを戒め、彼らが教会に行き祈りを捧げるよう勧めること。さもなければ、自分自身や隣人に大いなる災厄を招くことになりかねないからである。教会会議は、プロテスタントでさえ広く用いているその論法を持ち出した。すなわち、日曜日に労働していた者が雷に打たれたことがあるのだから、この日こそ安息日であるに違いない、というのである。「この日をないがしろにした者たちに対して、神の怒りがいかに烈しかったかは明白である」と高位聖職者たちは言った。そこで、司祭や牧師、国王や諸侯、そしてすべての忠実な人々に向けて、次のような訴えがなされた。「この日の名誉が回復され、またキリスト教の名誉のためにも、今後はいっそう敬虔にこの日が守られるよう、最大限の努力と配慮を払うこと。」-Thomas Morer, 『主の日の名称、概念、遵守に関する六つの対話による論説』271ページ

公会議の決議では不十分であったため、人々の心に恐怖を与え、日曜日の労働を差し控えさせる布告を発するよう、世俗当局に懇願がなされた。ローマで開かれた教会会議において、従前のすべての決定は、いっそう強い効力と厳粛さをもって再確認された。それらはまた教会法に組み込まれ、キリスト教世界のほぼ全域で世俗当局によって施行された。(ヘイリン『安息日の歴史』第2部第5章第7節を参照。)

それでも、日曜遵守に対する聖書的権威の不在は、少なからぬ当惑を招いた。人々は、太陽の日を敬うために、エホバの明確な宣言「第七日はあなたの神、主の安息日である」を退ける権利が教師たちにあるのかを問いただした。聖書の証言の不足を補うには、別の方策が必要であった。十二世紀の末ごろにイングランドの諸教会を訪れた日曜の熱心な擁護者は、真理に忠実な証人たちの抵抗に遭い、あまりにも成果が上からなかったため、しばしその国を離れ、自らの教えを強制する手立てをあれこれ探し

回った。彼が戻ってきたときには、その欠落は補われており、その後の働きではいっそうの成功を収めた。彼は、神ご自身からのものと称する巻物を携えてきたが、それには日曜遵守を命じるために必要な戒めと、不従順な者をおののかせる恐るべき脅しが記されていた。この尊いとされた文書—それが擁護する制度と同じほど卑劣な贋作であったが—は、天から落ち、エルサレムのゴルゴタにある聖シメオンの祭壇の上で見いだされたとされた。だが実際には、その出所はローマの教皇宮殿であった。教会の権力と繁栄を増進するための詐欺や偽造は、あらゆる時代において、教皇制の聖職階級によって合法と見なされてきた。

その布告は、土曜の午後の第九時、すなわち午後三時から、月曜の日の出までの労働を禁じ、また、その権威は多くの奇跡によって確認されたと宣言された。定められた時刻を過ぎて労働した者は麻痺にかかったと報告された。穀物を挽こうとした粉屋は、粉の代わりに血の奔流がほとばしり出るのを目にし、激しい水勢にもかかわらず水車は止まってしまった。生地をかまどに入れた女は、かまどは非常に熱かったのに、取り出すと生のままだった。第九時に焼くための生地を用意しながら、それを月曜まで脇に置いておくことにした別の女は、翌日、その生地が神の力によってパンに成形され、焼き上げられているのを見つけた。土曜に第九時を過ぎてパンを焼いた男は、翌朝それを割ると、そこから血が流れ出した。このようなばかげた迷信的な作り話によって、日曜日の擁護者たちはその神聖さを確立しようと努めた。(Roger de Hoveden, *Annals*, vol. 2, pp. 526-530 を参照。)

イングランドと同様にスコットランドでも、古来の安息日の一部を日曜日に結び付けることによって、日曜日がいっそう重んじられるようになった。しかし、神聖に保つべき時間はまちまちであった。スコットランド王の勅令は「土曜日の正午からは神聖と見なされるべきである」と宣言し、その時刻から月曜の朝まで、誰も世俗の仕事に従事してはならないとした。—Morer, 290、291ページ。

しかし、日曜神聖視を確立しようとするあらゆる努力にもかかわらず、パピストたち自身が、公然と、安息日の神聖な権威と、安息日にとって代わった制度の人間の起源を告白した。16世紀、教皇派の公会議は明白にこう宣言した。「すべてのキリスト者は、第七日が神によって聖別され、ユダヤ人だけでなく、神を礼拝すると称する他のすべての者によっても受け入れられ、守られてきたことを覚えておけ。とはいえ、私たちキリスト者は彼らの安息日を主の日に変えたのだ。」—同上、281、282ページ。神の律法に手を加えていた者たちは、自分たちのしていることの性質を知らなかったわけではない。彼らは意図的に自らを神の上に置いていたのである。

彼女に異を唱える者たちに対するローマの方針の著しい実例は、ワルド派に対する長く血なまぐさい迫害において示された。彼らの中には安息日を守る者たちもいた。第四戒への忠実さのゆえに、同様の仕方で苦しんだ者たちもいた。エチオピアとアビシニアの諸教会の歴史はとりわけ重要である。暗黒時代の陰鬱のさなか、中央アフリカのキリスト者たちは世の人々に見失われ、忘れ去られ、そして多くの世紀にわたり、自らの信仰を実践する自由を享受していた。しかしついにローマは彼らの存在を知り、ほどなくしてアビシニアの皇帝は、ローマ教皇をキリストの代理者と認めるよう巧みに丸め込まれた。ほかの譲歩もこれに続いた。

最も厳しい刑罰をもって安息日の遵守を禁ずる勅令が発せられた。(マイケル・ゲデス『エチオピア教会史』311、312ページ参照。)しかし、教皇の圧政はまもなくあまりに耐えがたいくびきとなり、アビシニア人はそれを自らの首から振り落とす決心をした。恐るべき闘争ののち、ローマ派は彼らの領土から追放され、古来の信仰が回復された。諸教会は自由を喜び、ローマの欺瞞、狂信、そして専制的権力に関して学んだ教訓を決して忘れなかった。彼らは孤立した王国の内に、キリスト教世界の他の人々に知られないままでとどまることに満足していた。

アフリカの諸教会は、教皇教会が完全な背教に至る以前に守っていたのと同様に安息日を守っていた。彼らは神の戒めに従って第七日を守る一方、教会の慣習に従って日曜日には労働を差し控えていた。最高権力を獲得すると、ローマは自らの安息日を高めるために神の安息日を踏みにじった。しかし、ほぼ千年のあいだ隠れていたアフリカの諸教会は、この背教に与しなかった。ローマの支配下に置かれたとき、彼らは真の安息日を退け、偽の安息日が高めることを強いられたが、独立を回復するとすぐに第四戒への従順に立ち返った。

過去のこれらの記録は、真の安息日とその擁護者に対するローマの敵意、そして彼女自身が創設した制度を称揚するために用いる手段を、明確に示している。神の言葉は、ローマ・カトリックとプロテスタントが日曜日を高举するために一致するとき、これらの光景が繰り返されることを教えている。

黙示録13章の預言は、子羊のような角を持つ獣によって表される権力が、「地とそこに住む者たち」に、そこでは「豹に似た獣」として象徴されている教皇制を拝ませると宣言している。また、二つの角を持つ獣は「地に住む者たちに、獣の像を作るように」とも言い、さらに「小さき者も大いなる者も、富める者も貧しい者も、自由人も奴隷も」すべてに、獣の刻印を受けるよう命じる。黙示録13章11～16節。子羊のような角を持つ獣に代表される権力がアメリカ合衆国であること、そしてローマが自らの至上権の特別な承認だと主張する日曜遵守をアメリカ合衆国が強制するとき、この預言が成就することは、すでに示されている。しかし、この教皇制への敬意において、アメリカ合衆国は独りではない。かつてその支配を認めた諸国におけるローマの影響力は、なお壊滅にはほど遠い。そして、預言はその権勢の回復を予告している。「わたしは、その頭の一つが死に至る傷を負ったかのように見た。しかし、その致命的な傷は癒え、全世界がその獣に驚嘆して従った。」3節。致命的な傷を負わされたことは、1798年における教皇制の失墜を指し示している。その後、預言者は言う、「その致命的な傷は癒え、全世界がその獣に驚嘆して従った」。パウロは「不法の人」が再臨まで存続すると明言している。テサロニケ人への第二の手紙2章3～8節。時の終わりに至るまで、彼は欺きの業を進めるだろう。また、黙示録は、教皇制にも言及してこう宣言する。「地に住む者で、いのちの書に名の記されていない者はみな、彼を拝む。」黙示録13章8節。旧世界と新世界の双方において、ローマ教会の権威のみに基づく日曜日の制度に払われる尊崇を通して、教皇制は礼拝を受けることになる。

19世紀半ば以来、アメリカ合衆国の預言研究者たちは、この証言を世界に示してきた。今起こっている出来事の中に、その預言の成就に向けた急速な前進が見て取れる。プロテスタントの教師たちには、日曜遵守を神の権威に基づくものとする同様の主張があり、また、神からの命令に代わるものとして奇跡を捏造した教皇制の指導者たちと

同じく、聖書的根拠を欠いている。神の裁きは日曜安息日に違反したために人々に下るのだ、という主張は繰り返されるだろう。すでにそれは唱えられ始めている。そして、日曜遵守を強制する運動が急速に勢いを増している。

ローマ教会は、その抜け目なさや狡猾さにおいて驚くべき存在である。彼女は何が起ころうとしているかを読み取ることができる。彼女は時機をうかがっている。というのも、プロテスタント諸教会が偽りの安息日を受け入れることによって彼女に敬意を払い、さらに彼女自身が往時に用いたのとまさに同じ手段によってそれを強制しようと準備しているのを見ているからである。真理の光を拒む者たちは、やがて彼女に由来する制度を高めるために、この自称無謬の権力の助けを求めるようになるだろう。彼女がこの働きにおいてどれほどたやすくプロテスタントの助けに回るかを推し量るのは難しくない。教会に不従順な者をどう扱うかについて、教皇権の指導者たち以上によく理解している者がいるだろうか。

ローマ・カトリック教会は、世界中に張り巡らされた組織網とともに、聖座の統制下にあり、その利益に奉仕するように構成された一大組織を成している。地球上のあらゆる国にいる数百万の信徒は、教皇への忠誠に自らが拘束されていると心得るよう教えられている。国籍や政府がいかなるものであれ、彼らは教会の権威を他のすべての権威にまさるものと見なすよう求められている。たとえ国家への忠誠を誓う宣誓を行うことがあっても、その背後にはローマへの服従の誓いがあり、それによって教会の利益に反するあらゆる誓約は無効とされる。

歴史は、巧妙かつ執拗に諸国の政務へ入り込もうとし、ひとたび足場を得れば、君主や民の破滅をも顧みず自らの目的を推し進めるといふ働きがあったことを証言している。1204年、教皇インノケンティウス3世は、アラゴン王ペドロ2世から次のような異例の誓約を引き出した。「アラゴン人の王たる私、ペドロは、我が君主たる教皇インノケンティウス、そのカトリックの後継者、およびローマ教会に対して、常に忠実にして服従することを公言し、約束する。また、カトリック信仰を擁護し、異端の邪悪を弾圧しつつ、私の王国を彼への服従の下に忠実に保持する。」-ジョン・ダウリング『ローマ主義の歴史』b. 5, ch. 6, sec.

55. これは、ローマ教皇の権力に関する主張、すなわち「彼には皇帝を廃位することが許されている」および「不義な支配者に対する忠誠の誓いから臣民を解くことができる」といふ主張と一致している。-Mosheim, b. 3, cent. 11, pt. 2, ch. 2, sec. 9, note 17.

そして忘れてはならないのは、ローマは決して変わらないことを誇りとしているということである。グレゴリウス7世とインノケンティウス3世の原則は、今もなおローマ・カトリック教会の原則である。もし力さえあれば、ローマは過去の諸世紀と同じ勢いで、それらを今なお実行に移すだろう。プロテスタントは、日曜日を高揚させる取り組みにおいてローマの援助を受け入れようと提案するとき、自分たちが何をしているのかをほとんど理解していない。彼らが自らの目的の達成に余念がない間に、ローマは自らの権勢を再興し、失われた覇権を回復しようと狙っている。ひとたび合衆国において、教会が国家の権力を用いる、あるいはそれを支配することができるという原則、宗教的遵守が世俗の法によって強制されうるといふ原則、要するに教会と国家の権威が良心を支配するものとされるといふ原則が確立されるなら、この国における

ローマの勝利は確実となる。

「神の言葉は差し迫った危険を警告してきた。これを顧みないなら、プロテスタントの世界は、罠から逃れるにはあまりに遅くなって初めて、ローマの目的が真に何であるかを知ることになる。彼女は静かに勢力を増している。彼女の教義は、立法の議場においても、教会においても、そして人々の心においても、その影響力を及ぼしている。彼女は高く巨大な建造物を築き上げており、その秘められた奥まった場所では、かつての迫害が繰り返されるだろう。彼女は人目を忍び、疑いを招くこともなく、時が来て一撃を加えるために、自らの目的を進めるべく、その勢力を強化している。彼女が望むのは有利な足場だけであり、それはすでに彼女に与えられつつある。私たちはまもなく、ローマ的要素の目的が何であるかを見て、身をもって感じることになる。神の言葉を信じて従う者はだれでも、そのゆえに非難と迫害を受けることになる。」
『大いなる論争』 563-581.